秋里籬島の狂歌
――籬島社中と名所図会に関して――

藤川玲満

はじめに

名所図会の著作で知られる秋里籬島は、近世中期の京都の作者で、俳諧や小説など幅広い領域で文学活動を行っている。稿者はかつて、名所図会に自詠の詩歌が収載されることを端緒に、その文学活動のうち俳諧に関して事跡を調査し、籬島が当初は貞門の系統で学び、後に蕉風復興運動に連なっていったことを明らかにした(注1)。そして俳諧とともに名所図会に収載している狂歌についても、活動の閲歴や狂歌壇との関連が有るのではないかと考え、籬島の狂歌とその周辺に関して判る事柄を整理した(注2)。本稿の起点となるので、まずそれらの事項を以下に述べておく。近世の文献では、志賀忍『理斎随筆』(注3)（文政六年序）が、『東海道名所図会』(注4)に収載された、

卯月の頃八橋の古跡にてかきつはたといふ五もじを句の下にすゑて狂哥をよめる

尋ねしが花のむらさき今はさめつその跡見れはみな麦の畑

の一首を取り上げ、「是等は業平の折句に劣らざる趣なるべし」と評している。先行研究では中西康夫氏が、折紙の図解に狂歌を添えた書物である『千羽鶴折形』（露菊著、寛政九年刊）に収載される狂歌の作者が籬島であることを明らかにされている(注5)。

同時代の撰集のなかには、文化年間刊、浅草庵市人撰の桑楊庵光七回忌追善集『狂歌萩古枝』(注6)に、籬島の署名のある次の一首が見出せる。

歳暮

かけまくも内侍所の御神楽にあすは春たつ初日まつなり

内侍所と初日を詠み込むこの一首には、籬島が自らの伝記を述べた『秋里家譜』(注7)中の自詠の発句の一句、

東雲は初日の内侍所哉

と通じる作意が認められる。

さらに籬島の周辺の人物まで拡げて狂歌との繋がりを見てみると、まず、籬島の伯父である俳人一十軒貞佐の門人に九如館鈍永がいる。『都名所図会』の挿絵の画工である竹原春朝斎は上方狂歌の丸派の祖である玉雲斎貞右との関連が指摘され（注8）、籬島の著述活動と関連の深い京都の書肆吉野屋為八は狂歌絵本の出版に携わっている（注9）。

従来判っていたのは以上のような事柄である。籬島と狂歌壇の関連についての具体的な件としては、浅草庵の撰集に入集していることが挙げられるが、その事情は明らかでない。そうしたところ、このたび、籬島の社中の狂歌が寛政一〇年春刊の浅草庵市人撰『男踏歌』にあることを御教示いただいた（注10）。本稿では、このことから籬島の活動とその周辺について新たに知り得る事実と、それらの事実を端緒とした名所図会の狂歌についての考察を述べたいと思う。

一　『男踏歌』と籬島社中

まず、籬島の狂歌が収載された撰集『男踏歌』について見ていくこととする。本稿において、書誌と引用は茶梅亭文庫蔵本に拠って記す。『男踏歌』は、寛政一〇年春成立、江戸・蔦屋重三郎による梓行で、体裁は画帖装の大本一帖、見開き全四三面である。浅草庵市人の自序（寛政一〇年一月）があり、諸国の狂歌連（と各位）の詠、計五七九首を収載する。作者（狂歌連）の所付は、上野・下野・常陸・奥陸・下総・相模・駿河・信濃・近江・紀伊・尾張・伊勢・南都・京都・浪花・武蔵・東都・越中・越後・遠江・三河・伊豆・甲斐である。関東を中心に、東海・近畿地方と東北・北陸の一部に及んでいる。

そして、そのなかに「京都籬島社中」とする狂歌が、次のように載せられている。

京都籬島社中

魁は威あつてたけき臥龍梅かせを祈りて芳しき春
祇園街　松田千代道

うら、かさ東風もふくろに梅か香をはんなりいれて口しめの内
仝　安倍亀天

にしき着てみるふるさとへ若菜つみ宰領弁当もてる実盛
九鯉亭湖夕

丘隅より飛て出るてふ鶯のはつ音は耳に止るとしれ

玉成堂車叫
くみ重の箱根の関を出にけり三雅をいはふ元三の今朝
遊東舎鼠雀
鶯も関の戸ざしを出ぬらんおもしろ〳〵と梅かかくらに
玉榮堂柳水
東海道名所図會てふふみを著し梓になる春のあしたよめる
元朝の見る物にせよあつま図會ふしも清見もこゝにゐなから
秋里籬島

これにより、まず、籬島が狂歌の一社を率いていたことが明らかとなる。そして、社中の人物として、千代道・亀天・湖夕・車叫・鼠雀・柳水の六名が知られ、このうち千代道と亀天は祇園街の人ということである。また、籬島の詠と詞書によって、これらが『東海道名所図会』（寛政九年一一月刊）が梓行されて迎えた正月、つまり寛政一〇年の歳旦の狂歌であることがわかる。

さて、先に触れたように、籬島による歳暮の一首が入集した文化年間刊の『狂歌萩古枝』も浅草庵市人による撰集であった。この件と『男踏歌』の件とを合わせ見て、籬島の狂歌活動と市人（宝暦五年―文政三年）との繋がりは定着したものであったと捉えられるだろう。そして、『男踏歌』から社中の人物と判明した九鯉亭湖夕も『狂歌萩古枝』に、

猿麿か哥もやかなしはらわたをたつ田の山の奥になく鹿

の一首が入集している。

『男踏歌』に入集する他の京都の社中としては、得閑斎繁雅の社中、二松庵倭文の社中、麦里房貞也の社中がある。得閑斎繁雅と麦里房貞也はともに九如館鈍永門の狂歌師で、貞也は貞門系の千載堂丈石門の俳諧師でもある。二松庵倭文については他に知られるところがないが、二松庵万英（安永九年没）に連なる狂歌師と思われる。試みに、これらの社中で『男踏歌』に入集している人について、『狂歌萩古枝』への入集状況を見てみると、得閑斎社中は七名、麦里房社中は三名、二松庵社中は三名が確かめられる。比較すると、籬島社中は籬島と湖夕の二名のみと少ない。また、得閑斎繁雅や麦里房貞也は狂歌集を多数編纂しているが、籬島社中には撰集が残っていない。このようなことからは、籬島の活動や狂歌壇における位置付けについて、得閑斎や麦里房の社中と同様・同列であったと考えるのは難しいように思われる。やはり籬島の活動は名所図会の執筆に纏わる詠作が中心だったのだろうか。以下、このたび明らかに

なった籬島社中に注目しながら、名所図会の狂歌について、詠作の事情や態度を考察していく。

これに先立ち、籬島の名所図会と浅草庵市人の狂歌の関連を確かめておく。名所図会における狂歌の収載は、一人で多数の作が採られている例は少なく、市人の狂歌も多くはない。『東海道名所図会』の浅草海苔の生産の風俗画（巻之六）に、

遊ぶ日は海苔とる舟も品川の洲へあけてほす浦の初春

『木曾路名所図会』の養老滝の図（巻之二）に、

孝行のこゝろを天も水にせすさけと汲する養老のたき

の詠が収載されている。

二　名所図会の狂歌——全体像と作中での働き

籬島による名所図会（都・拾遺都・大和・和泉・東海道・摂津・都林泉（名勝図会）・河内・木曾路）には、合計一三〇首余の狂歌が収載される。このうち湘夕・斑竹・籬島と署名のある自作は四〇首余で、ほかは他作者の詠と作者名を記さないものである。安永九年刊の『都名所図会』では、収載数が自詠一首を含む四首であるところが、天明七年刊の『拾遺都名所図会』で一四首と大きく増えており、ここから定着していったと見受けられる（注11）。そして、狂歌を載せる形として、その約六割が挿絵に書き入れられているという特徴がある。名所の絵と狂歌を取り合わせた書物としては、先に大坂の狂歌絵本『絵本名所浪花のながめ』（安永七年刊）がある。撰者は陰山白縁斎で、挿絵の絵師は竹原春朝斎である。『都名所図会』と『拾遺都名所図会』の画工春朝斎が手がけた作品である上に、この書は名所図会の主要な板元書肆で籬島と関連の深い京都の吉野屋為八が天明三年五月に求板しており（注12）、名所図会の挿絵に狂歌を書き入れる形は、これと同様であることを制作者が十分に意識したものであったと考えられる。

内容に関しては、収載する狂歌と当該項目の本文（解説記事の部分）との繋がり具合が注目すべき点である。名所図会における詩歌の収載については、立項される名所として歌枕の存在が大きいことから、やはり和歌が中心であり、収載数も圧倒的である。歌枕を詠み込んだ古歌を羅列して掲げるところも多い。一方、狂歌は作者やその周辺人物が名所図会の制作に即して詠んだと見えるものや、そこまで即時的とは言えないにしても同時代性を持ちあわせるものであるため、その関心事や作意が名所の解説記事と通ずることが多い。以下にその具体的な関係の在り方を探り、狂歌の作中での働きを考えていく。

まず、名所図会の制作そのものを素材として、籬島は『拾遺都名所図会』に次のように詠んでいる。

名どころはこれを都の案内者図会はしらとも思ふうつし画

この一首が添えられた挿絵は、書物を開いて遠方を指差す男と、眼鏡を手にその書物を覗きこむ男を描くもので、案内記のなかの名所を問い歩くさまと見える。この一首は、『男踏歌』所載の籬島の狂歌が『東海道名所図会』出刊の春を言祝いでいるのと似た、自賛を込めた作意と言えよう。同様のものとして、『東海道名所図会』の画工の一人の竹原春泉斎も、自身の描く「筆捨山」の俯瞰図（巻之二）に、次の狂歌を書き添えている。

狩野家さへ筆を捨たる所をば拾ふて図する無法眼也

この項目の本文に「里諺云、狩野古法眼東国通行の時、此山の風景を画にうつしてんやと筆をとるに、こゝろに逮ばず山間に筆を捨てしとぞ」とある。狩野法眼元信さえ描き切れず断念したという景勝を法眼でもない自分（春泉斎）が描いている、という自嘲と謙遜であろう。作者や画工のこれらの詠からは、実地踏査をもととする図会の新趣向とその評判への制作者の自負が読み取れるのではないだろうか。

次に、狂歌を収載することに編集の手法や技巧としての働きを持たせている件を取り上げる。『摂津名所図会』巻之一「住吉小町茶屋」の風俗画には、次のような籬島の狂歌が添えられている。

小町茶屋にて狂哥をよめる

茶の銭に九十九文を出しても手もにきらさぬ柄の長き杓

この風俗画に描かれた茶屋のなかには、店の女性が風炉の前に立ったまま、少し離れた腰掛に居る客まで、長い柄杓を差し伸べる躰が描かれている。この件は、本文では住吉神社の項、住吉浦の汐干の日の情景に「松原には染貝売、辻打の観物、小町茶屋の杓の柄長く、新家の赤蔽膝、とゝ屋煎餅まで、此日の賑ひ四海の春風穏にして」と僅かに触れている。この文中では格別目を引くに至らないが、籬島の狂歌は茶屋の名物の長柄杓を再び紹介し、これが茶屋の女性と客の間に距離感を生み出すおかしみを込めている。風俗解説を補強する働きと文学性を豊かにする詩歌収載の本来的な意義とを両立しているのである。

次の『和泉名所図会』巻之三「牛滝山大威徳寺」における自詠の狂歌にも、類似する働きが認められる。

牛滝のもみちを見て狂哥をよめる

紅葉見て耳は洗はず酒て去ぬわれは巣父そ牛滝の本

この一首は牛滝山の項目（本文）の末尾に掲げられる。まず、本文では、紅葉と牛滝山の山上にある牛の形をした石の景観に

ついて、「くれなゐの中より三つの滝だん〳〵におちて、牛石さしはさみて水の音つよく、霜に染たる紅葉ば、此牛の背に散かさなりて錦の褥を着たるか如し。」と解説する。続けて古歌と発句を並べ、それらは何れも紅葉の叙景である。そして、最後に掲げられたこの狂歌では、新たに「巣父」の故事が詠み込まれている。この故事は次のようなものである。堯帝が許由に天下を譲ると告げたところ、清廉な許由はこれを聞かされたことを厭って潁水で耳を洗い流した。その場に牛を連れて来ていた、やはり高士である巣父は、（そのような事由で許由が耳を洗った）水を牛に飲ませることを厭ったという（注13）。籬島の狂歌は、滝水で紅葉が牛に散りかかる有様を、錦の褥（栄耀）と国主の地位、牛尾滝と潁水、そして牛という重なりからこの故事に繋げて詠んでいるのである。当該の名所の直接的な解説には当たらないが、連想によって新たな素材（故事の世界）を取り込み、名所案内に文芸的な奥行きを持たせている。狂歌が文章での解説に準ずる役割を担っていると言うことができよう。

三　籬島社中と名所図会

続いて、名所図会における社中の人々の狂歌に着目することにより、籬島の狂歌活動と名所図会制作について考察を試みたいと思う。まず、名所図会に収載される社中の人々の狂歌を掲げる（便宜上、通し番号を付した）。

『東海道名所図会』（寛政九年刊）

① 梅枝がむけんの鐘をつきしとて蛭の地獄にうつくしい餓鬼　湖夕

箱根の挽物店を見て

② うつくしき玉手箱根のひき物や柳桜に桔梗荻萩　九鯉

『摂津名所図会』（寛政一〇年刊）

③ 寿や千代もさかろの松右衛門木の間をてらす朝日将軍　九鯉

堂島の市立を見て

④ 指さきで百万斛をうごかすは蝸牛の角の争ひと見ん　九鯉

⑤ 春は花秋はもみちとかはるのは屏風の岩の名画也けり　湖夕

『都林泉名勝図会』（寛政一一年刊）

瓶花を二星に奉ると聞て

⑥　わづかなる瓶に百花を池の坊星の嫁入の島台にして　千代道

⑦　引上る栄西長首座の音頭はたらり陀羅尼の鐘の音は三更　九鯉

⑧　七夕の籠花見んと門徒達星のごとくに金をちらして　亀天

『木曾路名所図会』（文化二年刊）

⑨　瓢箪にあらぬ鹿島のかなめ石鯰おさへし神の御ちから　千代道

九鯉亭湖夕の詠（注14）が六首で最も多く、ほかは千代道の二首と亀天の一首である。（湖夕には、狂歌のほか『摂津名所図会』と『和泉名所図会』に発句があり、千代道にも『河内名所図会』に発句がある。）『男踏歌』で知られる社中の人の狂歌が見られるのは寛政九年刊の『東海道名所図会』からで（『摂津名所図会』の三首は寛政一〇年刊の部分（三・四・六巻）に収載される）、このことと翌春の『男踏歌』所載の一首で籬島が『東海道名所図会』の出刊を詠んでいることの関連は注意すべきように思う。

（一）趣向と詠作の事情

前項において作者自詠の狂歌が、解説に準ずる働きをする例を挙げたが、社中の人々の詠についても、本文（解説記事）と緊密な関わりが確かめられる。『摂津名所図会』における、堂島の米市を詠む④の九鯉の一首を見てみる。堂島の市の本文には、次のようにある（傍線引用者、以下同様）。

堂島の市立は雑穀を糴（あきなふ）糶なり。其市人を見るに早旦より斜陽まで街に集りて、指頭を揺して百万の斛数を相対す。其囂しき事いはん方なし。

傍線部の形容と、九鯉の「指さきで百万斛をうごかす」の表現が一致している。さらに、この項には次の漢詩も載せられる。

人気知レ天回二指頭一　市声谷響乾坤州

草鞋腰付賈二千萬一　散レ水作レ雲謳曳レ眸　殿貞一

これも傍線部が本文と一致し、九鯉の狂歌と同じ作意が見受けられる。作者の殿貞一については不明だが、②の『東海道名所図会』で九鯉が相模国箱根名物の挽物細工を詠んだ箇所にも、貞一と署名のある次の狂歌がある。

いろ〳〵のひき物さいの河原也地獄遠きにあらす関門

この人も社中周辺の一人ではなかったかと推測する。

次の例も同様に本文との関わりが見出せる。『都林泉名勝図

会』における⑧の亀天の狂歌は本願寺の七夕の籠花を詠むが、本文には次のように記述している。

七夕の籠花数品家老候人院外より献上す。これを対面所縁側に飾りて参詣の諸人に観せしむ。又中元の日燈爐数箇家礼をもつて候人院外より捧ぐ。これを見んとて門徒の輩群参して御堂に詣す。

ここでは「七夕の籠花」と「中元の燈爐」の行事に門徒の詣でる類似した光景を対のように挙げており、それぞれに挿絵がある。亀天の狂歌は七夕の挿絵に書き入れられており、中元の燈爐の挿絵には次の籬島の漢詩が添えられている。

御堂ノ盆會燈爐麗シ　仰智光明不遠ノ思ヒ
一タビ念レハ則チ生スル極楽土　多ク投テ二金寶ヲ一涙袉ニ滋シ

この傍線部は、亀天の七夕の一首の下の句「星のごとくに金をちらして」に通じる。本文同様に、参詣の門徒の形容に同じ作意を込めた狂歌と漢詩を対置した趣向になっているのである。

以上のようなことから、社中の人々の詠についても、名所図会の制作に即して本文を踏まえた、あるいは収載する詩歌の間で作意に繋がりを持たせていたことが推測される。また、社中からは外れるが、次のような例もある。『摂津名所図会』巻之六に、紫雲山中山寺に参詣する道中の人々を描く風俗画があり、そのなかに次の狂歌が書き入れられる。

殊勝さよろくぢの道を安楽になまいたんぼを坊主もち也
浪花菱丸

狂歌に詠み込まれた坊主持ちとは、同行者の荷物を一人が持ち、道中で坊主に出会う毎に荷持ち役の人を交替することである。そして、この挿絵には、四人連れの男たちが坊主と行き会い、連れの内で風呂敷包みを受け渡している場面が描かれる。挿絵と狂歌とが、先後関係は不明ながら明確に合致している。この挿絵を描いた丹羽桃溪は大坂の絵師で、丸派の狂歌絵本を複数手がけた人である。狂歌の作者の菱丸は、撰集類への入集状況から丸派の人と見える（玉雲斎貞右社中による貞柳百回忌『狂歌玉雲集』（注15）（寛政二年刊）と桃縁斎二五回忌・玉雲斎一三回忌『狂歌二翁集』（注16）（享和四年刊）に入集する）。狂歌の詠と挿絵制作の緊密さが窺えると同時に、絵師と狂歌作者が近しい関係にあった可能性も考えられ、この例は、名所図会制作が同時代狂歌壇に接近した形跡にも見えるのである。なお、『摂津名所図会』には菱丸のほかにも丸派狂歌師の土丸・虹丸（混沌軒社中、玉雲斎貞右撰『大狂歌小集』（注17）（天明三年）による）の詠が収載される。

詠作の事情としてはまた、京都から離れた場所を詠む狂歌が、

現地に赴いて詠まれたものであるかも注視すべきことと思われる。まず、先にも触れた『東海道名所図会』の九鯉の②の詞書には「箱根の挽物店を見て」とあり、現地で詠んだものと取れる。『木曾路名所図会』の⑨の千代道の一首は、常陸国鹿島神社の要石を詠んでいる。本文によれば、この石は地中深く達し、鹿島明神が国中にはびこった大魚の尾を釘した謂れがあるというものである。『木曾路名所図会』の制作では、作者は享和二年の夏に実地踏査に出立し、文化二年三月に江戸でこの旅を終えている（本文冒頭の記述と画工西村中和の跋に拠る）。籬島は名所図会の制作に際して『都名所図会』の当初から実地踏査を行っているが、そうした中でも『木曽路名所図会』は、作品中にその道中が紀行に似た形で書き込まれることが顕著である。この鹿島神社の項の前後は、日本橋を経て、下総の木颪から船路で神崎明神・香取神社・息栖大明神・鹿島神宮を巡る行程で描かれる（巻之五）。農家の旅宿で質素な野草の膳に与り、翌日案内者を雇って神祠に至ったと述べた上で、祭神・境内・年中行事の解説と神書の引用が続く。風俗画の挿絵は、御手洗井に入る参詣者を描く図と要石を眺める人々の図があり、御手洗井の図には籬島の自詠で、

　ねぎかくるこゝろの垢を清めつゝわかみたらしの神のめくみに

の一首が添えられている。千代道の狂歌は要石の図のほうに書き入れられたものである。これが現地での詠作かは判別しかねるが、これを含めて、収載される狂歌が実地に赴いた機会のものであるならば、社中の者が名所図会制作の実地調査の場に居合わせた可能性もあり得るのではないかと考えられる。

（二）祇園の人の詩歌

『都林泉名勝図会』は、凡例に「林泉に古人の詩哥寡し。故に今時京師に於て名家の詩哥を乞需て多く図中に釘す。其中に作者自筆の詩哥もあり。誹諧狂哥も亦これに准ず。」と、当代の詩歌を収載したことを断り書きしている。そしてそのなかには、殆どが発句だが、祇園の人の発句を次に挙げる。

（「建仁寺門前十日笑姿参」の図に）

　千金の価は安し春の宵　きをん柳

（「四条河原夕涼」の図に（三句））

　すゝしさや袖の薄に月の露　ぎをんとみ

　萍の花くらべなり水のうへ　きをん柳

　笹過て笹をかたげん夕すゝみ　きをんいつ

（「顔相見」の図に（二句））

顔見せや白粉の雪紅粉の梅　ぎをん みや

水仙の寒くも双ぶ真向哉　ぎをん 柳

（「祇園御輿濯鑾物」の図に（三句））

つたなき身に西王母の鬮ひき侍るも人の笑ひ給ひみづからも深くはづかしけれと、ならひなれば今さらいなみかたくて出侍りける

あせしけき顔におほひし団かな　ぎをん いつ

風薫るかたへまはるや浮人形　きをん 栄次

ねり物や顔から落る紅の露　ぎをん 袖

四条河原の夕涼みや芸妓達の練り物の風習を詠んだもので、風俗画に書き入れられている。これと関係するのではないかと思われるのが、籬島社中の千代道と亀天が『男踏歌』の所付で判明するように祇園街の人だったことである。籬島が祇園の人々と文芸的な交流を持っていた可能性や、社中の人を通じてこれらの発句を図会中に取り入れているのではないかということが推測される。

次に島原の女性の作を見てみる。

（「嶋原花寄」の図に）

人さきにはなによりくるこてふかな　大淀太夫

（「同所京屋弥生興」の図に）

塵ならてはらふはをしやとこなつの花にかす〳〵をけるしら露　若紫太夫

（「同所藤屋月興」の図に）

行すゑをおもひて月をなかむれは袖のなみたにかけそこぼるゝ　小太夫

（「同所角屋雪興」の図に）

つむ雪に尾上を思ふ庭の松　松人太夫

さらに、古今集に白女、後撰集に肥後国遊女檜垣の嫗、後拾遺集に神崎の遊女宮城の和歌があることを述べ、次のように遊女たちの詠を列挙する。

わするなと契し春は夢なれやねさめとひ来る初雁の声　遊女大橋

宿かろといふ僧もなきしくれかな　同十市

吉野さそ郭あたりの花菜さへ　同小紫

入定の日ともしらずに紋日かな　同瓜生野

おとこなき寝覚はこはい蚊帳かな　同花咲

宵々の待身につらき水鶏哉　同若糸

郭の情景や遊女の身上を詠むものが続く。祇園に加えて島原の遊女たちの作を収載したところには、花街の女性に向けた籬島

の眼差しの一端が見えるのではないか。遊里に寄せた籬島の自詠としては、『摂津名所図会』の新町の項に、

乾凍の道をしやら〳〵男伊達

の発句があり（注18）、本文では、「傾城傾国は前漢の李延年が伝より出て、国色の麗人を一城の尊卑こゝろを傾け一国の人民眼を送りて其容儀を賞ずるのみ也。強に城を弊り国を摧す名にはあらず」と持説を述べている。また、『東海道名所図会』には、名物焼蛤の風俗画（巻之二）に、

しぐるゝややき蛤のにゆる音

と自詠の発句を添え、続けて次のようにある。

四日市に近年せをといふ名の妓婦あり、こゝろばへ優にして糸の音妙に和哥を詠ず

寄箏恋

夜々は恋しき事の音もたへずひく手に落る我なみだかな　せを

これも名産の白魚、蛤にもならひけんかし

と、芸妓とその和歌を挙げ、四日市の名物に準えて讃えている。社中の人的関係やそこから推測する祇園の人々との文芸的な繋がりに由来するかとも思われる、花街の女性に向けた温かな眼差しが読み取れるのである。

（三）狂歌の周辺と名所図会の著述態度

名所案内記や地誌的な書物の内では、記述内容の正確さや厳密さに関わる点で著者の態度に幅がある。たとえば、籬島が『都名所図会』を著す際に依拠した先行書の一つである『山城名勝志』は、旧記に忠実に従って著し、伝承や考察はこれと区別する厳格な態度を持っており、このことで地誌として高い評価を得ていた。籬島の名所図会は、複数の先行書物から蒐集した内容を纏め上げた上に実地踏査の情報や文学的表現を加える形成手法のもとで、『山城名勝志』ほどの厳密さを追求するような姿勢ではないと言える（注19）。そうしたなかで、狂歌を収載する周辺に、謬伝・巷説をめぐって籬島がその価値観や態度を示しているところがある。

『摂津名所図会』巻之五「笠森稲荷社」では、この社が「瘡神」と称され、瘡毒を患う人が祈願するようになっていることを取り上げている。この習俗について、『延喜式』にある「隼（はやぶさ）神」を世人が謬って「はやくさ（早瘡）」と解したものであることを説き、参詣する親子連れを描いた挿絵にも「世に瘡神といふは謬なり」と書き入れている。ところが、籬島はさらに次のようにも評して、自詠の狂歌を添える。

それ神は信敬によつて利生あり。一心の謹啓に頭をかたむ

け再拝怠らすんばなどか感応空しからんや

笠と瘡まぎらかしても利生あり雨露をもらさぬ神の恵に

これが謬伝であっても、殊勝な心がけで拝するならば利生があるだろうと、寛容な態度で記している。

そうした一方で、『東海道名所図会』巻之四「阿波波神社」では、この神社が世に「無間山」と称されることを、次のように記している。

諺に云、むかし此山に無間の鐘といふあり。此鐘を撞ば現世にては無量の財宝を得るといへとも未来は無間地獄に堕落すとなり。故に此山を無間山といふ。（略）按るに、無間山とは此峯へ登る坂路ほそく嶮くして一たひ踏損ずれば無間地獄へ落るに似たり、若踏はづして谷へ落つる時は此寺の鐘を撞て人を呼集めて助る也。故に無間の鐘といふか。（略）延喜式神名帳に出たる神社にあらぬ号をつけて神号の廃する事を歎て、こゝに雑説を記し是非を糺すのみ。

ここでは、現世利益を言う無間の鐘の俗説によってあらぬ山号で呼び習わされ、神号が廃れたことを非難している。そして、阿波が嶽の俯瞰図の挿絵には、湖夕の①（前掲）の狂歌、

梅枝がむけんの鐘をつきしとて蛭の地獄にうつくしい餓鬼

がある。この一首は、俗説を用いた脚色で知られる『ひらがな盛衰記』等の登場人物の梅枝を踏まえている。

籬島の名所図会は、先行地誌を主要な典拠とし、これに匹敵する規模の構想を備えながらも、内容には文学性と娯楽性を取り入れるところが大きく、狂歌の収載もその手法の一つと言える。これらの例からは、その実現が、解説における正確さ・厳密さの保持と、謬伝を含む巷説に対する柔軟さとの均衡の問題と深い相関関係にあることが窺い知られる。

（四）狂歌と発句・漢詩

名所図会中の籬島および社中の狂歌は、同じ素材を詠む発句や漢詩とともに掲げられるところがある。ここまでに触れたもので振り返ると、まず九鯉の④と殿貞一の漢詩はともに、堂島の米市での、商人たちの取引の光景を詠んでいた。また、亀天の⑧と籬島の漢詩はともに、散銭を詠む作意が通ずるものであった。

そして、このほかにも籬島自詠の狂歌と漢詩、あるいは狂歌と発句の二通りが掲げられるところがある。『摂津名所図会』には砂場名物の蕎麦を次のように詠んでいる（巻之四）。

平麺といふちり粉の蕎麦をもてなされし折に

平麺の生所もしらず宿もなしちり粉つもつて山盛のそば

砂場蕎店浪花珍　蠣殻茸檐不易春
石臼多回頭上力　来賓脹腹数千人　　籬島

狂歌では名物の麺を軽妙に詠い、漢詩では名店の賑わいの光景を作意としている。また、『和泉名所図会』巻之三「信太杜」には、千歳の狐が化けた美女であるとの伝承を持つ稲荷の祭神（葛の葉明神）を素材に、

神の灯か雨夜に光る森若葉　　籬島
雪の日しのたの森を通りて狂哥をよめる
美しい葛の葉毎の雪女朝日出れはきえ〳〵となる　斑竹

の二作がある。発句と狂歌で、雨夜や雪の森の幻想的な叙景を試みているのである[注20]。また、これらの籬島の作と並べて社中の湖夕による、

水遠し昼顔の咲狐原

の句もある。先の籬島の作とは異なり、狐のほうを詠むものだが、この湖夕の句の中七・下五の部分は、籬島の著した俳諧の作法書『誹諧早作伝』[注21]（安永五年刊）に見られる表現である。『誹諧早作伝』は、天象・四時・地理・神祇・釈教・人倫・草木・気形・器財・衣食の部類に計四七〇語余を収め、各々に関連する語彙や用例を挙げたものであるが、草木の部の「昼顔」と気形の部の「狐」の箇所に、「昼顔の咲く狐原」の表現が収録されているのである。

以上のような様相から、名所図会において当代の風俗や伝承を描くとき、籬島は発句・狂歌・漢詩の形式の間を自在に行き来して表現することを試みたのではないかと考えられる。このことは、社中をはじめとする当代の他作とも相俟って成されていると見受けられる。そして、社中の人の発句や、冒頭に述べたように『萩古枝』の狂歌が『秋里家譜』の発句と作意が通じる件からは、籬島社中の狂歌が、俳諧活動と繋がるものではないかとも推測される。

おわりに

本稿では、浅草庵市人撰『男踏歌』によって明らかになる籬島社中について、また社中の周辺から見えてくる籬島の名所図会における詩歌収載の特質について述べてきた。特質として浮かび上がったのは、次のようなことである。狂歌と本文との繋がりからは、狂歌が解説を補強する、あるいは新たな案内の素材を導くといった働きが認められ、詠作（作意）と書物の趣向が緊密な関係にある件も見出せる。花街の人々の詩歌に関して

は芸妓らに向けた作者の眼差しと収載の事情が注視すべき点であり、名所の俗伝は狂歌の素材であると同時に、その取扱いは解説の著述態度と連鎖する問題と言える。そして、籬島と社中による狂歌・俳諧・漢詩の形式の交錯する在り様は名所図会の文芸的な試みと捉えられる。

社中の実態に関して、その詳細と籬島の文芸活動全般との影響関係、及び江戸の浅草庵との関係は、さらに追跡すべき点と考えている。

注1　拙著『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』（勉誠出版、二〇一四年）第二章「籬島の俳諧活動」。

2　注1に同じ。

3　『日本随筆大成』第三期一（吉川弘文館、平成七年）所収。

4　本稿における名所図会の引用は、次の各本に拠る。『都名所図会』『拾遺都名所図会』―架蔵本、『都林泉名勝図会』―『新修京都叢書』（臨川書店）、『摂津名所図会』『木曽路名所図会』―『版本地誌大系』（臨川書店）、『和泉名所図会』『東海道名所図会』―国文学研究資料館蔵本。句読点は私意に施した。

5　「千羽鶴折形私考」『東京と京都』昭和四一年二月以降連載。

6　東京都立中央図書館（東京誌料）蔵。

7　国文学研究資料館蔵。

8　羽生紀子氏「流光斎・春朝斎・桃渓と狂歌―丸派狂歌サークルへの参加―」『武庫川国文』六三（平成一六年三月）所収。

9　陰山白縁斎撰『浪花のながめ』（天明三年求板）、芥川貞佐撰『狂歌寝さめの花』（天明六年求板）、陰山白縁斎編『狂歌絵本浪花の梅』（寛政一二年刊）。

10　中野眞作氏と小林ふみ子氏に御教示いただいた。

11　寛政三年刊『大和名所図会』には狂歌が極めて少ないが、この作品は、籬島が『広大和名勝志』の編纂なかばに没した植村禹言の草稿を得、加筆して完成させたという異例の成立事情があり、そのことと関係するかと考えている。

12　国立国会図書館蔵、吉野屋為八求板本刊記による。

13　『高士伝』（晋・皇甫謐撰）（早稲田大学図書館古典籍総合データベース画像）による。

14　九鯉と湖夕を九鯉亭湖夕の署名と考えている。

15　古典籍総合目録データベース大阪府立中之島図書館蔵本画像による。

16　国文学研究資料館館蔵和古書データベース画像による。

17　古典籍総合目録データベース大阪府立中之島図書館蔵本画像による。

18　無署名ながら、同じ『摂津名所図会』に収載される、

九軒町に遊ひし時達磨の画に賛をのぞまれしに

九軒にて居つゞけせしを人さんがしりくさつたか南無三放蕩

の一首は、遊里での詠作である点が注目できる。

19　注1前掲書第三章「『都名所図会』『拾遺都名所図会』考」。

20　「信田杜」の項には、ほかにも俯瞰図の挿絵に「しくるゝやしのだのもりを庄屋が嫁」の籬島自詠がある。

21　架蔵本による。

付記　『男踏歌』所載の籬島社中の狂歌を御教示くださいました中野眞作先生と小林ふみ子先生に深謝申し上げます。本稿執筆にあたり、茶梅亭文庫御所蔵『男踏歌』を使用させていただきました。厚く御礼申し上げます。

（ふじかわ　れまん／本学准教授）

キーワード＝秋里籬島、狂歌、男踏歌